

第11回生活科学コンソーシアムシンポジウム

コロナ禍における保育現場の現状と対応

－保育士間の同僚性、協働性に着目して－

日本保育学会課題研究委員：東京家政大学 花輪 充

1

本研究の主旨

日本保育学会課題研究委員会（佐々木、新井、三宅、花輪、西山）では、2020年度より「コロナ下における保育と子どもの育ちを考える」をテーマとして、新型コロナウイルス下における保育実践の工夫と課題についての調査を実施し、子どもや保育実践において将来に渡って懸念される問題や解決・改善方法、実践により定着してきた事項等について明らかにし、今後の保育実践や運営の改善に生かす方略について検討を重ねてきている。

1. 鳴門教育大学 2. 愛知教育大学 3. 神戸女子大学 4. 東京家政大学 5. 岡山大学

2

第74回大会（2021.5開催）では、「新型コロナウイルス下における保育実践－実践の工夫と課題－」、第75回大会（2022.5開催）では「コロナ下における保育と子どもの育ち1－予備調査から明らかになったこと－」を中心として議論を進め、報告を行ってきており、次年度は本調査となる。

ここでは、第74回大会に向けて実施した保育現場での聞き取り調査より浮かび上がった、コロナ禍における保育現場の現状と対応について、保育士間の同僚性、協調性に着目しながら報告を行いたい。

3

同僚性・協働性とは

池本（2004）の定義によれば、

同僚性
→ 「職場でお互いに気楽に相談し・相談される、助け・助けられる、励まし・励まされることのできる人間的な関係」

協働性
→ 「異なる専門分野が共通の目的のために対話し、新たなものを生成するような形で協力して働くこと」

4

中坪（2014）は、

「同僚性」
→ 「保育者同士が互いに支え合い、高め合っていく協働的な関係のことであり、小学校以降では、同僚同士が授業を見合い、それぞれの知識や経験を行き来させながら、相互に授業力を高めているような関係やあり方」と定義している。

園内研修など

5

なぜ「同僚性」を高めなければならないのか？

→ 近年、保育現場は、保育者の多忙感の増大、多様化する保護者のニーズへの対応などの問題に直面しており、心の健康を損なう保育者も少なくない。

→ 保育者が個別に対応するのは限界がある。

チームとして保育に取り組むことが求められてきた！

同僚性を向上させることは、
→ 保育者同士の学び合いを深め、自分の子ども理解を根幹から問い直させ、保育者として大きく成長を遂げるための一躍を担う！

6

永井（2021）は、乳児保育にかかわる保育士間の協働性と連携について、以下の7つの論点に整理している。

- ①子どもへの適切なかわりかのために、種々の情報を速やかに確実に職員間で共有すること。
- ②報告・連絡・相談などのルールや、それらを情報共有するための体制づくりに関すること。
- ③子どもが安心して過ごすためには保育士間の連携が必要であること。その中で子どもと保育士の信頼関係が築かれていくこと。
- ④複数担任だからこそ、円滑な流れを作る方法や役割分担を検討する必要があり、誰が保育にあたってても一定の質を維持するためにも「連携・協働」が必要であること。
- ⑤保育観を共有するために、が必要であること。「十分な相互理解と良好なコミュニケーション」や「カンファレンス」のような場面を通じた共通理解の場
- ⑥一人ひとり丁寧にかかわるためには、月齢差など個人差が大きいため、様々な情報を把握して、複数の目で確認することが大切であること。
- ⑦より豊かな保育を行うためには、チームプレイを意識し日頃のコミュニケーションが大切であること。

以上のように、保育士間の「連携・協働」を、保育観の共有等を通してチームプレイで行うことが、一人ひとりへの丁寧なかかわりより豊かな保育のために必要であると指摘している。

7

池本¹⁾、中坪²⁾、永井³⁾の主張からは、

同僚性や協働性の発動こそが、「『どこにもやり場のない』再帰性、『どこにも確実なものがない』不確実性、『どこまで進めても終わりのない』無境界性」を特徴としている教師（保育者）の仕事を、徒労感や虚しさといった苦役に変換させることなく、創意的で創造的な実践へと導く条件であることに気づかされる。

1. 岡山県立岡山朝日高等学校 2. 広島大学 3. 大阪総合保育大学
1) 佐藤学編著『教育 変革への展望 4 学びの専門家としての教師』I・1 岩波書店、2016. p.22

8

コロナ禍における保育者の現状

コロナ禍が続く中、日々感染のリスクと闘いながら、子どもたちの保育を担っている保育者たち。その姿はメディアを通じて悲痛な叫びとして私たちの耳目に入ってくる。

保育者の負担は半端ではない。玩具消毒、室内備品の除菌、換気などの業務等が通常業務に加わり、負担の増加は収まる気配さえないといえよう。

9

そうした中、保育者たちはいかにして、保育業務に対峙しているのだろうか。

この度の聞き取り調査やアンケートの回答から見てきたものは、ピンチをチャンスと捉えようとする保育者たちの姿勢であった。

そこには、コロナ禍における子どもとの関わり、職員間のかかわり（同僚性と協働性の発動）から得られた気づきや工夫、それに裏付けられた保育への探求が感じられた。

10

倫理的配慮

本調査は、2020年度日本保育学会第74回大会課題検討研究会シンポジウムに向けて実施したものである。

調査にあたり、対象園・対象者に回答が強制でないこと、また、個人情報等を厳重に管理することを知らせ、調査協力の承諾を得たのだが、統括園長及び各園園長からの意向があり、園名については明記することとなった。

11

ここでは、日本保育学会第74回大会課題検討委員会の調査研究に協力をいただいた東京世田谷区・稲城市に拠点をおく社会福祉法人聖愛学舎、もみの木保育園（統括園長・理事長 物井洋介）5園における、コロナ禍における保育実践の工夫と課題から浮かび上がる保育士間の同僚性、協働性の変容と向上について事例をもとに報告する。

12

はじめに

聖愛学舎もみの木保育園は？

現在、東京都世田谷区に3園、

- ▶認可保育園
もみの木保育園太子堂、もみの木保育園希望丘
- ▶小規模保育所
もみの木保育園Mom太子堂

東京都稲城市に2園、

- ▶認可保育園
もみの木保育園長峰、もみの木保育園若葉台

を展開している。

太子堂 (園児136名、職員58名)
希望丘 (園児74名、職員37名)
Mom太子堂 (園児12名、職員9名)

長峰 (園児126名、職員60名)
若葉台 (園児135名、職員61名)

※職員に関しては、正職・パート含む

キリスト教の教会学校をルーツとし、60年以上にわたって子どもたちに寄り添う保育を実践している！

13

もみの木保育園の保育スタイル

平常時より、


- ▶iPadで写真撮影、活動を動画撮影 → プロジェクト活動に活用
- ▶オンラインで他園や海外の保育園と交流 → プロジェクト活動に活用
- ▶PCの映像をプロジェクターで流して表現活動 → プロジェクターの光で影遊びを展開

コロナ禍においては、

- ▶園で制作した番組 (もみの木チャンネル) を定期的にYouTubeに配信
- ▶懇談会をZoomで開催
- ▶親子で行うチャレンジ活動の映像をYouTubeにアップ → 家庭で、ダンスやふれあいあそびに取り組んでもらう

その結果

- ▶参加率も上がり、園や保育に対する興味をもってきているのが感じられたとのこと
- ▶次年度入園希望の問い合わせも多くなったとのこと



もみの木保育園HPより

14

目的・方法

令和2年度課題研究委員会「新型コロナウイルス下における保育実践に関する研究」の企画主旨に則り、東京において、数々の問題と向き合いながらも、実践の工夫や新たな保育の可能性を切り拓いている「聖愛学舎もみの木保育園」に協力を仰ぎ、

8項目について施設長及び職員の方々にアンケートとインタビュー調査を行い、その回答を調査・分析することにより、ウイズ・コロナ、ポスト・コロナ社会における保育構造や子ども支援の方向性を探究する。

- 1) コロナ禍における子どもと保育者、子ども同士、職員間、保護者や地域との関わりについて、努力・工夫されていること、
- 2) コロナ禍における職員間の関わりについて、
- 3) コロナ禍における、保護者や地域との関わりについて、
- 4) コロナ禍における子どもの生活環境等や遊び環境について、
- 5) コロナ禍における子どもの遊びや活動、行事等について、
- 6) コロナ禍におけるICT等の活用について、
- 7) コロナ禍における保育者のモチベーション維持に関する対策について、
- 8) その他について、 **努力・工夫されていること！**

保育士間の同僚性・協調性の変容と向上

15

コロナ下における「もみの木保育園」での課題と方略

①「子どもと保育者、子ども同士、職員間、保護者や地域との関わり」について

課題	方略
職員と子どものマスク越しのコミュニケーションについて	一人一人との関係を丁寧に身につけることを一層心がけること
手洗いやうがいへの徹底について	子どもたちが安心して過ごすことができるようにすること
「くっかないで」「離れて」という言葉がけに関する職員	威圧的な言葉にならないよう気を付けながら幼児にはその意味と必要性を理解させ、それぞれが考えて行動できるようにすること
登園自粛期間中の子どもとの交流について	オンラインを使った在宅児と在園児とを交流させる活動 (もみの木ミーティング) を活性化すること

同僚性の向上
協調性の向上
同僚性の変容
協調性の変容

16

②「職員間の関わりについて」について

課題	方略
勤務体制の改訂により、戸惑いを感じた保育士に対して	園内研修等でそれぞれの役目と目的の再確認等
マスク、手洗い、消毒の励行及び距離感の保持、換気の徹底について	3密を回避した職員同士の関わりに関する意識の強化
コロナ下における保育士のネガティブな心情について	モチベーションの維持と向上に対する配慮 リーダーを決めてオンラインで日々の連絡や相談
業務等について	会議等の見直し、審議事項等の厳選など

協働性の検討
協働性の向上
同僚性の向上
同僚性の変容

17

③「保護者や地域との関わりについて」について

課題	方略
保護者からの問い合わせ等について	「滞在時間を短く」「できるだけ話を最小限に」をモットーとして、園側からメッセージ発信。 面談形式による手厚い説明の実施 (気持ちに寄り添った懇談の機会の確保)
家庭との連絡等について	お便り帳アプリ (Hugnote) の使用 自粛期間中におけるクラスごとのオンラインによる保護者、園児、担任の交流会を実施。 1ヶ月に1度、電話で子どもの家庭の様子を聞くことを常態化。
保護者との交流について	在園児の家庭及び地域に向けて教材 (あそびのタネ) 配布。 園運営の子ども食堂 (もみの木食堂) による弁当の無料配布

成果/テレワーク中の園児家庭、地域のシニア層、子育て世代との繋がりができた。現在は週2回あるが、いまだに予約電話が殺到している。

協働・連携の向上
協働・連携の改革

18

④「子どもの生活環境等や遊び環境」について

課題	方略
保育内容の改善と充実について	<ul style="list-style-type: none"> 一斉活動より、子どもたちが分散して、自分の興味のある遊びを継続的に集中して取り組めるような保育の実践
遊具等の衛生管理等について	<ul style="list-style-type: none"> 布のおもちゃを減らしたり、消毒や換気等の徹底。 パーテーションの設置、遊具の消毒、布製品の厳選などへの気配り。 タオル人形（2歳児使用）の随時持ち帰り、洗濯の奨励
子どもの生活環境、遊び環境等の再構成	<ul style="list-style-type: none"> Eエリア（保育室 ランチルーム 園庭など）ごとの定員を定め、室内遊びのコーナーを増やし、遊びの分散化をはかる

協働・連携の充実
協働・連携の検討
協働・連携の充実

19

⑤「子どもの遊びや活動、行事等」について

課題	方略
行事等の見直しについて	<ul style="list-style-type: none"> 行事の分散開催による変革（行事ありきではない保育のあり方の模索） 保護者の目線に立った行事ではなく、子どもの思いや姿に立脚した行事のもちかたへの移行
子どもの遊びや活動の見直しについて	<ul style="list-style-type: none"> 「小グループでの活動を奨励
生活エリア、活動エリアについて	<ul style="list-style-type: none"> テーブルごとの定員と着席位置の確保。 午睡児のベッドの距離と方向性の確保。 ランチルームの交代入れ替え

協働・連携の変革
協働・連携の変革
協働・連携の向上

成果／行事は保護者を呼ぶことを前提にするのではなく、この行事をどうしたいのか、子どもの姿からクラス単位で考えていくことにより、より子どもの今の興味や学年にあった活動のもちかたができています。また、行事ありきではなく、行事をきっかけに継続的な活動になっている。

20

⑥「ICT等の活用」について

課題	方略
ICT等の活用と応用について	<ul style="list-style-type: none"> I padで写真や動画に撮り、プロジェクト活動に活用
他園との交流・連携について	<ul style="list-style-type: none"> オンラインで他園や海外の保育園と交流
表現活動への応用について	<ul style="list-style-type: none"> PC映像をプロジェクターで流して表現活動に活用（プロジェクターの光で影遊びを実施）
成果／連絡帳という媒体がなくなり、より確実に情報を渡すことが可能となった。「物」を介さないやり取りができるようになったことは安全性を担保し、的確な情報の共有にも繋がっている。	<ul style="list-style-type: none"> 「おたより橋アプリ（Hugnote）」の導入（保護者と園との連絡の強化、写真や動画等の情報共有）。 「もみの木チャンネル」を定期的にYoutubeに配信。 懇談会のオンライン化による参加率・効率化の促進。 通常保育をYoutubeで配信（「やふれあいあそび」の映像を配信） 親子で行うチャレンジ活動（「やふれあいあそび」の映像を配信） 園行事（卒園式 夏祭り）のYoutube限定公開。
保護者との連絡・連携について	
入園希望者への対応について	<ul style="list-style-type: none"> 園内紹介動画（Youtube）

協働・連携の向上
協働・連携の向上

成果／家庭からご面談で参加できたり、仕事の人も、その時間に休憩をとり、食事を摂りながら参加してくれたり参加率も上がり、園や保育に対する興味をもってくれているのが感じられた。

21

⑦「保育者のモチベーション維持に関する対策」について

課題	方略
職員モチベーション維持について	<ul style="list-style-type: none"> 職員の研修対策の実施。 課題図書を選定し購入費用負担 園内オンライン研修の開催。 特別休暇の付与。 会議打ち合わせの見直しとオンライン化による仕事の効率アップ。 職員の心身の状態把握、活動方法の相談等。 テレワークによる個々に見合った適切な課題提示及び成果確認。 感染防止対策に課題を発見した職員の評価。 感染防止対策を続ける職員の評価。 行事や取り組みの変更と改善。 職員への心身のケア。 感謝の気持ちを言葉で伝えること。 保育の振り返り機会の設定。

協働・連携の向上

成果／衛生委員会の中で、職員の心身の状態を維持、又はアップしていく手段を産業界とも相談し、出来る事はすぐに実行している。

成果／主任、セクランリーダーと、情報を共有し、些細な問題でも上げるとすぐに時間を取り、一緒に解決策を考え、リーダー達と考えを向いにしておくことで、職員からの質問も的確に答えることができ、職員のモチベーション維持に繋がっている。

22

⑧「その他」

法人として	<ul style="list-style-type: none"> 福利厚生制度加入者にサマーギフトカタログプレゼントを実施。
担任として	<ul style="list-style-type: none"> クラスの活動内容と場所と人数の関係を考え、難しいときは諦めずリーダーに相談する。
チームとして	<ul style="list-style-type: none"> 職員やその家族の体調不良時は安心して休んで貰えるようにシフトの調整 フリー保育士や保育補助の役割に対する感謝 感染防止対策の中で保育の質を上げるために、「〜だから出来ない」ではなく「どうやったら出来るようになるか」課題を持ち続ける 「お疲れ様でした、助かりました」など仕事上での職員間での声かけの徹底

同僚性の向上
協働性・同僚性の変容

成果／集まってる食事会ができない中、大変好評だった。

成果／気づきやすい利点でより子供に向き合った活動が出来ている。また、少数保育者が増えたため、振り返りがしやすく、一体感を味わえるようになっている。

23

結果と考察

●物井洋介統括園長は、聖愛学舎5園は、この1年、新型コロナウイルス感染リスクの中で、日々の保育運営を「新しい日常をめざしてのチャレンジ」としてきたと言う。

●その精神を全職員に行き渡らせるために取り組んできたプログラムは、「コロナ下におけるもみ木の保育園での課題と方略」で説明したとおりであるが、それを稼働させる原動力となっていたのが各園協働で行われる委員会活動である。

●委員会は「保育・教育委員会」「給食・食育委員会」「保健・安全委員会」「雇用委員会」「人材育成委員会」で構成され、各園の保育士がプログラムの運営を担当する。


同僚性の向上
協働性の向上
協働性の向上

24

- 保育士によるシンポジウム、講座、研修、テーマ別勉強会、養成校での授業なども聖愛学舎ならではの職員養成プログラムといえる。
- 職員**の主体性を重んじる**ため、研修の中身はプログラムを担当する保育士に委ねられるとのこと。
- 研修とはいえ、**貴重な自己発信の場**といっている。
- こうした構造は一朝一夕に出来上がったものではない。**長きに渡り、全職員の対話によって成熟されてきたもの**であるといえよう。

協働性・同僚性の向上

25



まとめ

- 2020年度の事業計画の柱は「**21世紀型保育・教育の推進**」であった。
- 統括園長が言うには、これまでの保育を見直す**絶好の機会**として捉えていたとのこと。
- 「**子ども主体の学びの場への転換**」「**行事中心からプロジェクト中心への転換**」、それに加え、職員の「**働き方改革**」さも考えていたところに、突如立ち上がった**新型コロナ問題**である。
- 事業計画の柱を、ただちに実行せざるをえない状況になってしまったことは避けられないと統括園長はいう。
- ピンチをチャンスに、と言わずとも、聖愛学舎5園にとって、コロナ禍における保育運営は、**レシーブ（受身）**ではなく**プロデュース（産出）**の機会になっているように思える。
- 新型コロナの影響に対応して事業改革を推進させようとする、聖愛学舎もみの木保育園の柔軟性と適応力には期待感が高まる。

26

謝辞

この度の日本保育学会課題研究調査研究【新型コロナウィルス下における保育実践－実践の工夫と課題－】にご協力をいただきました「もみの木保育園太子堂」「もみの木保育園希望丘」「もみの木保育園Mom太子堂」「もみの木保育園若葉台」「もみの木保育園長峰」の統括園長はじめ各園の園長の皆様、保育士の皆様、保護者の方々にこの場を借りて心より御礼申し上げます。

付記

本研究は、2020年度日本保育学会第74回大会課題検討研究会シンポジウムにおいて、花輪が担当、発表したものをブラッシュアップしたものである。

ご清聴ありがとうございました。

27